

イエイツの「一エーカーの草地」について

——〈悟り〉か〈狂気〉か——

小堀隆司

肉体の力も想像の力も萎え衰えていよいよ死期の差し迫っている最晩年の詩人、イエイツは 'An Acre of Grass' 「一エーカーの草地」(1936.11.)のなかで、ついに死にゆくであろう我が身を心静かに思いながら、また同時に痛ましいまでに狂おしく思いながら、深夜の沈黙のなかで自身の来し方、行く末を歌っている。この詩は四連、各六行から成っており、その短さとともに、はっきりとその内容を異にした二つの流れを持っている。すなわち、第一連と第二連では、来し方と死にゆく身を心穏やかに観照しているかと思えば、第三連、第四連に進むと、そうした静謐な情調をうち破って我が身の蘇生を、その、殆んど残されていない僅かばかりの未来に空しくも烈しく願ってやまない。

人生の弥果にあって、詩人の胸の裡に募ってきたものは、いかなれば、悟るべきか、悟らざるべきか、という抜き差しならぬ問題であった。これまで現実に抗って自身の〈存在〉を求めようと、様々な仮面を創造し被りつづけてきたいま現在、仮面を永久に外し、苦悩に充ちた現実から超脱して何ものにも囚われずに、絶対的な自由の境地に立ちながら悟達したいと詩人は願う。また一方、たとえ悟らずして愚昧な生を生きようとも、仮面を、つまり狂気としての仮面を被ることによって、詩人は凡そ叶えられぬ〈存在〉に向って自身を生かしてみようとする盲目的ともいうべき生への意志におも固執しようとする。悟るべきか、悟らざるべきかという、一見、極めて単純な二者択一は、従

つて、静観的観照的姿勢を採るべきか、それとも実存的姿勢を採るべきかというふうに言い換えられるだろう。それは、また〈認識〉と〈生〉の問題にもなる。こうした視点に立ちながら、「一エーカーの草地」を第一連から第四連まで順に読み進み、そしてこの詩を通じて晩年のイエイツの生がどこにその錘鉛を下ろしているのかを探ってみたい。さて、「一エーカーの草地」は次のような情景を描いて始まる。

Picture and book remain,
An acre of green grass
For air and exercise,
Now strength of body goes;
Midnight, an old house
Where nothing stirs but a mouse. (1)

人間を、生の営みの儂さを象徴している、朽ち果た「古い家」のなかでひとり佇んだまま、「肉体の力」の萎えた老詩人は、連綿とつづく人間の営為の所産であると同時に、その人間を超越するものでもある「書物」や「絵」を眺めている。そして年老いた己れ自身を投影する「ねずみ」だけが「古い家」のなかで微かに動いている。「古い家」も「ねずみ」も、もちろん人間も、時の流れのなかで避けられぬ運命として、いつしか、必ず滅び去っていくが、しかしその死にゆくべき人間の生が織り込まれてある「書物」や「絵」だけはあとに残る。ここで詩人は芸術の永遠性を讃えているかのように見受けられがちだが、この第一連の情調はただ讚美するだけのような誇らしげな気分には不似合いではないだろうか。むしろ、死を目前にしても悲しく後悔しているような、また心充ちてもいるようなアンビヴァ

レントな心持ちを醸し出している、といえよう。

去りゆくものと、とどまるものに眼差しを向る第一連から第二連へと進むと、その眼差しは外から内へと、つまり人間や芸術（「家」、「ねずみ」、「書物」、「絵」）から詩人そのひとへと移り、自身の心の奥底に注がれる。

My temptation is quiet

Here at life's end

Neither loose imagination,

Nor the mill of the mind

Consuming its rag and bone,

Can made the truth known.⁽²⁾

かつては「私」（＝詩人）の心をどこかへ駆り立ててくれた「誘惑」は、老骨の身となつたいまでは、極めて「静かな」もので、その「誘惑」がために「私」の心が軽ろやかに弾んだり、あるいは重く沈んだりして大きな浮沈を味わうことはもはやなくなった。そうして、いよいよ「人生のどんずまり」に至つたいま、「私」はこんなことを思い知つたのである。張りつめていた緊張の糸の縛れをいかんともし難い、弱々しい老人の「緩慢な想像力」も、また単調な、一面的でしかない「精神の挽臼」も、「真理」を我々に知らしめてはくれないのだ。結局、「真理」というものは、凡そ知ることのできないものなのだ、ということが皮肉にも「私」には解つた。

こうして「真理」の認識の不可能性を認識するという、いわば無知の知ともいふべきパラドキシカルな境位は、さらに心静かな詩人を現実から退散させて悟達した境地へと立たせるのだろうか。そこに立って詩人は無知の知という

アイロニーを内包した〈真実〉を悟ろうとするのだろうか。もしそうであるならば、詩人のそうした思いを確証する手立てとして、「私の心の誘惑は静かである」という詩句についてしばらく考えてみたい。果して「誘惑」とは、何故の、そして何処への誘いなのか。「静か」であるとは、果して、力萎えたから、否でも心でも自ずと穏やかでいられるのか。それとも、悟りの境地に至ろうとするから、その静寂とした雰囲気に適しく「誘惑」は烈しからずひたすら「静か」に詩人を惹き寄せるのか。それは、あの「存在の統一」(Unity of Being)を求めがゆえの、というよりもむしろ、無知の知としての〈真実〉を希求するがゆえの、そして全き「真理」を曇らせてしまう現実を超脱したニルヴァーナへの「誘惑」である、とまずは見做して差控えないだろう。汚穢に充ち、卑俗なる欲望の蔓延る現実への誘惑ではない。現実にあってもその醜悪な姿に拮抗しつつ、「真理」に至るであろうあるべき、自身(仮面)を絶えず創造してきた詩的想像力が枯渇と化し、充分に發揮されなくなったという詩人の存亡に関わる危機は、詩人をしてそれでも〈真実〉に縋りつきたいという最後の望みを抱かせしめるのである。そうした望みゆえに、それを叶えてくれるはずのニルヴァーナへの「誘惑」は、老いぼれた詩人を「静か」に捉えて離さないであろう。

また、第一連と第二連のこうした解釈とは違う読み方もできないことはない。死の不可避性を背負った人間の生の儂さ、人生の敗北、失意を前面にうち出して歌っているといえるかもしれない。いかんともし難く「人生のどんずまり」にひとり佇んで、来し方を眺めやる老詩人は、後悔しつつ人間の無力さを痛感しているのではないだろうか。悟達して人生の舞台から降りようとする詩人は、果して、それによって生の完成を望んでいるのか。それとも、悟達の世界からは遙かに遠くひとり「古い家」のなかにとり残された詩人は人間の無能さゆえの敗北に失意を覚えているだけなのか。これらの疑問に対しては、次の第三連、及び第四連の思いもよらぬ激越な反転を繰り広げる場面を俟って始めて答えることができるだろう。

さて、第三連に移るまえに、こうした疑問に答えるためにも、またこの詩全体を読解するためにも、まずは仮面に

関するイエイツの興味深い意見に注目してみるのは、強ち無駄ではあるまい。かつて *Per Amica Silentia Lunae* 『月の沈黙を友として』のなかに収められてある ‘Anima Hominis’ 「人間の靈魂」で、*“We make out of the quarrel with others, rhetoric, but of the quarrel with ourselves, poetry.”*⁽⁶⁾と述べたイエイツは、確かに「自己」の闘争」を最大の信仰箇条として様々な詩を創ってきた。「自己」の闘争」は必然的に“anti-self” 「反对我」を、仮面を創造する。つまり、仮面としての詩を創り出すのである。それにしても、「人生のどんずまり」に追いやられた自分には、そうした「自己」の闘争」を引き摺りながら仮面を被ろうとするエネルギーはすでに消えうせてしまっていて、それによる「存在の統一」は不可能であるという事実を、「一エーカーの草地」のなかの老詩人はどれほど深く痛感しているのだろうか。

同じく「人間の靈魂」のなかで、さらに老いて死に臨む自分自身の姿を眼底に浮べながら、イエイツは自身の末路についてこう述べていた。

A poet, when he is growing old, will ask himself if he cannot keep his mask and his vision without new
bitterness, new disappointment.⁽⁴⁾

「一エーカーの草地」の完成から遡ること、二十年ほど前の言葉である。「さらに新たな苦汁や失望を嘗めなければ、仮面や幻想は維持できないのだろうか」と抱懐する疑念からは、当然のこととして祈念が生れる。もはや思い悩まずに安心立命としていたいということ、ひとつの仮面をこそ守りつづけたいということ——このような、老人としての卒直な願いは、救済への途に通じているであろうし、また絶えず仮面を変貌させねばならぬという、イエイツ固有の詩の原理、〈生〉の掟を考えてみれば、何よりもそれは仮面からの解放を苦海たる人生からの解放を物語っていると

いえよう。

こうして「人間の靈魂」は次のようにその結末を締め括っている。

Surely, he may think, now that I have found vision and mask I need not suffer any longer. He will buy perhaps some small old house, where, like Ariosto, he can dig his garden, and think that in the return of birds and leaves, or room and sun, and in the evening flight of the rooks he may discover rhythm and pattern like those in sleep and so never awake out of vision. Then he will remember Wordsworth withering into eighty years, honoured and empty-witted, and climb to some waste room and find, forgotten there by youth, some bitter crust.⁽⁵⁾

最初の件りは「仮面」及び「幻想」と、「苦惱」との関わりを語っているように、先の引用文と殆んど内容は変わっていないが、老詩人は引退して人里離れた処に「小さな古い家」を買い、自然に包まれながら決して「幻想」から醒めることもなく、心も乱れることなく穏やかに暮らすことだろうと、イエイツは自身の老年を予想する。そうしてさらに、八十歳まで生きながらえたあのワーズワースを思い起して彼と老いた我が身を重ね合わせることもだろうと思いつく。榮譽に浴してはいるもの、心は虚ろなワーズワースのなれの果てを、イエイツは冷めた眼差しでもってこゝろを見透すのである。年老いた詩人が人氣ひとけのない部屋に辿り着いたとき、一体そこで何を眼にするのかといえば、青春からは遠く忘れ去られてしまった「味気ないパンの切れっぱし」がひとつあるだけの寂寥とした風景なのだ。「味気ないパンの切れっぱし」とは「一エーカーの草地」でいえば、まさに老詩人を仄めかす「ねずみ」にはかならない。もはや変わることはない「仮面」を被りおおせたならば、「幻想」から醒めることはないだろうと予想して固く信ず

る詩人は、泰然としていられるように見えるが、そう思うのも束の間、ほどなく生の現実を、「仮面」の剝がれた素顔をまともに見てしまうのは必至であろう。「人間の靈魂」のこの最後の件りに関して、たとえばH・J・レヴィンはペシミズムの現れを指摘している。⁽⁶⁾ また「リズム」や「型」は一度だけ見出されれば事足りりというのではなく、真の仮面を見つげるためには新たな「苦汁」や「失望」という経験が待望されなければならないと論ずるH・ブルームは、さらに浪漫的崇高さをより顕わにする〈喪失感〉に注目している。⁽⁷⁾ ともあれこの件りは、安らかでありたい、解放されたいと祈念すればするほど、ますます安らかになり難く、ますます解放され難いという詩人の暗澹とした宿命を予感させるかのである。「一エーカーの草地」を読むとその感がいつそう強い。

果して、剥き出しの現実に眼差しを注ぐのは、そうぜるを得ないがためだったのか、あるいはそうすべきであるからこそ眼差しを注いだのか。「古い家」に住む老詩人は榮譽に浴しながらもその「味気ないパンの切れっぱし」に落魄した我が身を見るであろうとイエイツが予感したごとく、實際この詩にあっても詩人は「古い家」に動めく「ねずみ」に、老衰した自分の姿を重ねて眺めている無力な老人にすぎない。思うに、こうしたネガティブな姿勢がポジティブな姿勢へと変容する転位の契機は、全く期待されるべくもないであろうか。不安や落胆にも増してはまだ悟らざる老詩人は、悟ること、いや、それ以上になおも生に〈存在〉に執することはないのであるか。転位の契機は「人間の靈魂」に限っていえば、確かに内包されている。すでに引用した二つの文章の間に、実は次のような文面が組み込まれている。それによってその可能性は十分に確証され得るだろう。

Could he if he would, knowing how frail his vigour from youth up, copy Landor who lived loving and hating, ridiculous and unconquered, into extreme old age, all lost but the favour of his Muse?

The Mother of the Muses, we are thought,
 Is Memory, she has left me, they remain,
 And shake my shoulder, urging me to sing.⁽⁸⁾

仮面の呪縛からの解放を夢想しはするもののイエイツは、愛しては憎み、嘲られては抗い、“extreme old age”を見事に生き抜いた詩人ランドーのごとく、自分もまた生きることが出来るだろうか、と不安に期待の入り混じった胸裡に問いかけるのである。自分の肩を揺さ振って詩を詠めとせきたてる詩神のほかはすべて喪ってしまった、と‘Memory’「記憶」と題する詩のなかでこうランドーは歌うのだが、確執ともいふべき彼の“extreme old age”に思いを致すとき、「人生のどんずまり」に立つイエイツはいかなる気持ちも心の奥処に宿すのだろうか。ランドーの〈確執〉か、それともワーズワースの〈落魄〉か（こうした問題は「一エーカーの草地」では第三連、第四連に至ってはじめて顕在化されるので、ここではそれに触れない）。

イエイツにあっては、「存在の統一」を常にその射程に置いて、現実の、素顔のままの自身とは反対のもの（anti-self）を、仮面を創造すること、すなわち詩を創造しようとするのだが、彼は *A Vision* 『幻想録』のなかでこう語っている。

All unity is from the *Mask*, and the *antithetical Mask* is described in the automatic script as a “form created by passion to unite us to ourselves”, the self so sought in that Unity of Being compared by Dante in the *Convito* to that of “a perfectly proportioned human body”.⁽⁹⁾

このように自身を完璧なまでに一体化しようとする「熱情」によって「仮面」が創造され、さらにその「仮面」は「存在の統一」を象徴していることが理解されよう。ここで忘れてはならないのは、「熱情」という言辞の意味する領域である。喜怒哀楽といった感情や、あるものへの熱い望みを表すのはいうまでもないが、「熱情」は、少なくとも真の「熱情」はいつも〈受苦〉と表裏して一体なのである。〈存在〉を基底にして創造される「仮面」、「仮面」を基底にして実現される〈存在〉——こうした地平にあって、時の流れのなかを様々に移り変わっていく赤裸々な心の有様ありように応じて、詩人は「存在の統一」という理念を挺子に「仮面」を創造し、また「仮面」を創造することによって「存在の統一」の完成を目ざさなければならない。

さて、この辺りで「一エーカーの草地」の残りの二連について考えてみたい。〈落魄〉を余儀なくされ、〈悟り〉を是しとしようと思いついても、それでもやはり、心のどこかでその〈悟り〉への静かな思いが秘かに逆流しはじめているのをイエイツは感受する。「仮面」の創造を支える〈失望〉を、そして、“The desire that is satisfied is not a great desire, nor has the shoulder used all it might that an unbreakable gate has never strained”⁽⁹⁾ と書いているように、不可能なものに託さるべき、叶わぬ「望み」を賞揚して、イエイツはそれらを詩人の抱くべきものとしてきた。自身の位置から最も遠くにあるものを望見すべきイエイツは、かくして、第三連で、凡そ叶えられぬ「望み」を狂おしく歌うのである。

Grant me an old man's frenzy,

Myself must I remake

Till I am Timon and Lear

Or That William Blake

Who beat upon the wall
Till Truth obeyed his call,⁽¹¹⁾

詩人はまずもって「私自身を創り直さねばならない」と悲痛な口調で叫ぶ。それは同時に〈存在〉の恢復を意味して
いよう。ついに「真理」を知らずして死際に臨む老詩人は、すでに第一連、第二連において、すべては滅びゆくのだ
という運命をいまさらながら引き受け、「真理」を視ることのできぬ盲いた自身の位置を甘受した。そして不可視なる
「真理」の在処を闇夜（現実や生を超越した領野）に求めて、詩人は〈無知の知〉という〈真実〉の認識をアイロニ
カルにも獲得したかにみえた。だが、悟達しかたにみえた詩人は翻って、決して悟ることのできない俗の汚穢に充ち
た「溝」へと堕ち込み、つまり無知にして盲目なる裸形の「私自身」へと還り、そこから素顔の「私自身」を仮面を被
る「私自身」へと創り直そうとする衝動が、真夜の闇から理由もなく湧き起ってくる。そうして、この衝動は“an old
man's frenzy”へと高揚していく。かくして自身の〈存在〉を恢復すべく、老耄の詩人に「授けて」もらいたいも
のは、まずは「老人の熱狂」なのである。「熱狂」は破壊的にして創造的な“Daimon”「ダイモン」の呼び出しに誘
われるかのごとく湧出し、それによってタイモンやリヤ、そしてブレイクという仮面を被ろうとする。〈存在〉を目
ざすには、是非とも「ダイモン」と仮面が必要とされる。

シェイクスピアの *Timon of Athens* 『アテネのタイモン』に登場する、最後まで人間を憎み呪いつづけた、あの
激情的で高潔なタイモン、荒れ狂う嵐に向って怯まずに絶叫する老い果たりヤ王、そして「真理が彼の要求に従うま
で／壁を叩きつづけた」とまでいわしめた、あのブレイク。「私」は、タイモンやリヤやブレイクのように、なるため
でなく、まさに彼等そのものに、すなわち〈他者〉に「反对我」になるがために「熱狂」を演じようとする。「熱狂」
とは、換言すれば、〈他者〉であるという仮構された地平を目ざすことの不可能性を引き受けようとする「私」の意

志にはかならない。たとえば、ランボーがいわゆる「見者の手紙」のなかで〈私とは一個の他者である〉と書いた、その〈私〉と一脈通ずるものを、この詩の「私」は包蔵しているといえるが、さらに引用した第三連の“*self*”という接続詞に注目してみると、「私」の原像がより明瞭にされてくる。そこには、二つの対立する生の位相（仮面と素面、〈他者〉と自己）が“*self*”によってはっきりと分断されているのが見て取れよう。すなわち、不安と失望に噴まれながら、あるいは〈悟り〉に惹かれながらも、「熱狂」としての実存を生きようと決意する素顔の「私」と、〈狂気〉という衣裳をまとったタイモン、リヤ、ブレイクに擬して仮装された仮面の「私」とが、浮びあがってくるだろう。このように二重の「私」が“*self*”によって顕わにされる。在るようで無い、また無いように在るような不可思議な境界、〈自己〉と〈他者〉との関係でいえば、〈自己〉が〈他者〉になり、また〈他者〉が〈自己〉になるような、〈自己〉と〈他者〉との不可視の境界を右に左に浮遊しつつ詩人は自身の〈生〉と〈存在〉の根源に垂下するのである。

仮面と素面、〈他者〉と〈自己〉が歴然と区別される二元論的世界を還元して、その差異が定かでないような、捉え難く混沌とした根源的な領野に辿り着いたとき、はじめてのつべらぼうともいうべき素顔の〈自己〉は、仮面としての〈他者〉によってその輪郭が次第に明確にされていくにちがいない。このことは、同様に「老人の熱狂」についてもあてはまるだろう。〈狂気〉としての「熱狂」と〈正気〉を意味する理性が、またこの詩においては「精神の挽回」、つまり悟達したい心が、未分化の状態にあるような、分節化される手前の地平へ遡行して、はじめて「熱狂」の零度が、つまり「熱狂」の照射する何かが見えてくるはずである。

「老人の熱狂」に加えてさらに詩人に「授けて」ほしいものは、一体何なのか。それは最後の第四連で歌われているごとく、毅然とした誇り高き「精神」なのである。

A mind Michael Angelo knew

That can pierce the clouds,

Or inspired by frenzy

Shake the dead in their shrouds,

Forgotten else by mankind

An old man's eagle mind.⁽¹²⁾

「ミケランジェロの知っていた／叢雲を突き抜ける精神」と、「熱狂」によって掻き立てられ、「死者」を揺すって目覚めさせる「精神」と、そして眼下に見る現実世界から決して眼を逸らさずに、絶えず現実に視線を投げかける「老人の驚の精神」。これら三つの「精神」に通底するものを剔出してみると、「ダイモン」に喚び起された「熱狂」に憑かれながら、死に眩しい照明をあてて逆に生を垣間見ようとする姿勢が窺れる。同じ「精神」とはいえ、あの、非創造的にして機械仕掛けのごとく単調極まりない「挽臼のような精神」ではなく、そうした単調さのもたらず模糊とした皮膜をこそ打ち破る「精神」なのである。老いて「人生のどんずまり」に追いやられこそすれ、その「精神」を自身の裡に取り込みたいと願う詩人の思いは、なんと虚しいまでに烈しく燃え立つことであろうか。さらに「老人の驚の精神」についていえば、同じ *Last Poems* 『最後詩集』所収の ‘*Those Images*’, 「あれらの幻像」で、詠むべき詩のテーマを見つけ出すことのできる “an eagle on the wind”⁽¹³⁾ を捜し出せ、と歌われているように、蒼穹を悠然と漂う「驚」は詩の “image” を求めて現実世界を俯瞰するという認識の眼差しを持っている。要するに、老人に適しい「驚の精神」は、下界での人間の惨劇を遙かに諦視しつつそのなんたるかを、その真なるものを見抜くべく、有無をいわせぬ冷徹なる眼差しを備え持っているのである。

こうして「一エーカーの草地」を第一連から第四連まで読み通してきた結果、何よりも明らかなのは、世を諦観して悟達する姿勢は採らずに、イエイツは混濁した現実でこそ「存在の統一」を目ざして「熱狂」的な生を生きようとしていることである、といえるだろう。ところで先に、第一、第二連を考察した際に、暗澹とした負性の世界に心を向けるのは何故なにゆえにそうなのか、という問題を提起したままであったが、この詩全体を読み終えたいま、その問題に言及してみたい。人間の運命を思い知らされて絶望に陥った、救い難い老詩人イエイツは、その剥き出しの現実を見ざるを得なかったのはもちろんのこと、さらに飛躍して見るべきであったのも、また当然のことであると見做されよう。それは、思うに、すべて滅びゆくという運命を受け容れ、人間の無力さを容認したとき、知られざるものとしての「真理」の存在に気づくという逆説的な〈叡智〉を裡に秘めた、崇高な〈悟り〉のためにはなくてはならぬ行為であらう。それは、また、「存在の統一」を夢想しながら人間の無力さをさらにもう一度生きようと、「熱狂」的な「精神」を震わせて決意する実存のためにも必要不可欠な行為とされるだろう。本来的なものの欠落した現実を不安と失望の裡に見ざるを得ない姿勢から、〈悟り〉によってか「熱狂」によってかは別問題として、とにかくそこから、〈存在〉の奪還をねらってまずは現実を見るべきだ、さらには見ようとするのだという姿勢へと転位するところに、憶見を恐れずにいえば、まさにニヒリズムが胎動しているのである。こうして詩人は〈悟り〉の世界に背を向けて現実の世界に再び身を挺していく。

しかし、この詩の、より奥深くに隠されている文脈を辿ってみると、一概にはそう決められない何か秘んではまいいか。表層的な文脈からすれば、確かに詩人は観照的姿勢よりも実存的な姿勢を選び取った。観照的〈悟達〉の拠って立つ位置といい、実存的「熱狂」の依拠する位置といい、凋落した生を厭うペシミズムを凌駕し得るニヒリズムこそが、こうした位置の原基を支えているのは疑うべくもない。先に述べたように、現実を見ざるを得ない姿勢にはペシミズムが、現実を見るべき姿勢と見ようとする姿勢にはニヒリズムが流れているといえるが、さらに見るべき姿

勢を観照的な〈悟達〉として、見ようとする姿勢を実存的な「熱狂」として捉えてはどうであろうか。すべてを無礙味にしてしまう暗い現実を凝視すべき必然としての要請は、自ら見ようとする自由としての意志へと、現に移行した。とすれば、このニヒリスティックな眼差しは、後者の、見ようとする姿勢のほうにより強く感じられよう。知られざるものとしての「真理」を承認することで、無知の知というメタ。「真理」に至ることこそが、つまり〈悟達〉という完成を実現することだけが、観照的姿勢の大いなる眼目とされるならば、そこに流れるニヒリズムは飽くまでも完成に至るための、いわば媒介と化してしまいうちがいない。では、実存的姿勢に流れるニヒリズムはどうであろうか。頽落した自身が「熱狂」をもって〈存在〉に肉薄しようとして決意した結果、たとえ自身を「創り直し」たとしても、「創り直し」た瞬間にまた「熱狂」としての仮面は剥がされてあらざるべき素顔を晒け出すという虚しい生の繰り返し——こうした、さらなる虚無の深淵の底へ限りなく墜落するという危険を孕んだ〈生〉を、必然として、またさらに自ら選んで生きようとする、このこと自体が実存的姿勢に窺われるニヒリズムといえよう。「人生のどんずまり」にあつて、想像の力も肉体の力も衰えた老詩人が、タイモンやトリアやブレイクであるという仮構のもとに演じられる「熱狂」的な〈生〉は、このようなニヒリズムを包蔵しているのである。

また、「一エーカーの草地」の直後に置かれている詩「What Then?」⁽¹⁴⁾「いったい、それがなんだ?」では、栄光や叶えられた幸せな夢を前にして「What then?」⁽¹⁴⁾といつては、自らそれらを価値なきものにしてしまう。ここにも、いかほどかのニヒリズムが脈打つていよう。イエイツのニヒリスティックな態度は、「真理」を認識できずに不安や失望を味わいながら、没落していく人間の運命を受容したり、あるいは再生さるべき自身のさらなる崩壊をも体験することを必然的なこととして甘受したりするだけではない。そればかりでなく、価値あるものを価値なきものに、意味あるものを意味なきものにして、〈存在〉の原質に極めて冷静に立ち還ろうともする。人間の持つ明も暗も無みするニヒリズムは、イエイツにとって、認識すべきひとつの厳然たる事実であると同時に、それを確証するために〈生〉

に課せられたひとつの実存形態なのである。

「一エーカーの草地」は、死の不安や失望のなかで〈悟達〉するよりも、不安や失望を逆手にとって「老人の熱狂」という〈生〉を生きようとする自身を歌った詩である、ということは周知の事実である。このような大きな反転を描く詩は、自我と「反对我」、素顔と仮面との劇的な闘争をテーマとして歌うべきだというイエイツの詩の原理を知っている読者にとっては、かなり馴み深い。二項対立のパラダイムをまともに援用すれば、「一エーカーの草地」の読解はいともたやすい。すなわち、この詩においてイエイツは、両者に引き裂かれ、迷妄を強いられ、そして〈悟り〉か〈狂気〉かと迷いながらも、最終的には〈狂気〉を演じて生きようとしている、という解釈が即座に成り立つ。なるほど、〈悟り〉は〈狂気〉といい、「熱狂」という「精神」に宿されているニヒリズムのなかへと、決して否定的な形ではないにしても、同化・吸収されていくが、〈悟り〉よりも〈狂気〉を選ぶのだという一方的な解釈それ自体、二元論的思考が孕む危険な陥穽に堕ち込んではいないだろうか。⁽¹⁵⁾ 想えば、「人間の靈魂」のなかでイエイツは、老年の自分をワーズワースとランドローに擬えて思い巡らしていたが、どちらを選ぶかは疑問に附されたままであった。ワーズワースの〈落魄〉かランドローの〈確執〉か、という二者択一は、その内容を殆んど変えずに二十年ほどの歳月を経て、〈悟り〉か〈狂気〉という問題になっているのは、実に興味深いことである。

ともあれ、二元論的思考を全く捨象した別の地平に立って思惟を巡らすのは望むべくもないことである。従って二元論的地平において繰り広げられる両者の交錯が、たとえばAであるかと思えばBであるような、またBであるかと思えばAであるかのような、錯綜した位相が看取されねばならない。そこには、究極的にはどちらであるのかは判断しかねるほどに、深い矛盾を包含した重層的な位相がある。そうしたアポリア（〈悟り〉か〈狂気〉か）に論理的決着を直ちにつけようとするならば、大きな齟齬をきたすことになるだろう。

どちらとも決定しかねる二者択一の問題について、イエイツは一九三〇年の日記にこう記している。

I think that two conceptions, that of reality as a congeries of beings, that of reality as a single being, alternate in our emotion and in history, and must always remain something that human reason, because subject always to one or the other, cannot reconcile. I am always, in all I do, driven to a moment which is the realisation of myself as unique and free, or to a moment which is the surrender to God of all that I am.

.....

Could those two impulses, one as much a part of truth as the other, be reconciled, or if one or the other could prevail, all life would cease. ⁽¹⁶⁾

両極は和解したり、融合したりはしない、と見做すイエイツの認識は、それによって中庸の道を説いたり、なにがしかの心の均衡を保ったりすることはない。ここで肝心なことは、両極の融合の不可能性という事実だけである。どちらか、一方に偏執すべき選択、またそのように偏執すべきか、それとも両方を調和させるべきかという選択——イエイツは、この幾らか複雑な二者択一の枠を超えていると同時に、やはりその枠のなかで生きらざるを得ない、という矛盾に充ちた限界を認識している。ともあれ、たとえ一方に偏執したとしても、必ずその志向は他方を孕んでいるといえよう。また、両極の調和への志向には、すでにその分裂の萌しが表示されているだろう。

〈存在〉に至るには、いかほどの〈認識〉が必要とされ、また〈認識〉を持つには、いかほどの〈生の狂気〉が必要とされよう。こうした背理からは到底避けられないということを、「一エーカーの草地」は読者に歌いかけているかのようである。〈認識〉したかと思えば〈生〉きてはおらず、〈生〉きてはいると感ずれば〈認識〉できずに、こうして堂々巡りをして一体、何が得られるのだろうか。〈認識〉と〈生の〉、〈悟り〉と〈狂気〉の背理に決して潤色を施

そうとしてはならず、それをそのままに冷然と引き受けなければならぬ。これをしも、イエイツの、ニヒリズムの頭れと断じられよう。

一九三九年、一月四日付、E・ペラム夫人宛の手紙で「真理」について“Man can embody truth but he cannot know it.”⁽¹⁷⁾と書いておられるように、イエイツは「認識」することのできない「真理」を「具象化」すること、つまり詩においてこそ「真理」は表現できることを、死の直前に言明している。してみると、まさに「一エーカーの草地」においてイエイツは、〈悟り〉と〈狂気〉の間を跨ぎ超せぬという不可能性に懊悩しながらも、知ることのできない「真理」を歌っているのではあるまいか。〈悟り〉という衣裳を身にまとうことは決してないが、その〈悟り〉の観照的姿勢に見られる冷やかな認識態度を反映していとる考えられる。「老人の驚の精神」を、つまり透徹した眼差しを持ちながら、イエイツは「老人の熱狂」という仮構された〈生〉を生きることによって〈存在〉に至ろうとするのである。そこにはイエイツの〈詩と真実〉があるといえよう。

〈注〉

- (1) W. B. Yeats; *Collected Poems of W. B. Yeats*, (London, Macmillan, 1977) p. 346 (略記号 C. P.).
- (2) *ibid.*, p. 346.
- (3) W. B. Yeats; *Mythologies*, (London, Macmillan, 1978) p. 331 (略記号 M.)
- (4) *ibid.*, p. 342.
- (5) *ibid.*, p. 342.
- (6) H. J. Levine; *Yeats's Daimonic Renewal*, (Michigan, U. M. I. Research Press, 1983) p. 52. なお著者はニーチエの『悦ばしき知識』の七九番「不完全性の魅力」を引き合いに出して、そこで論じられている〈敗北した幻視者〉の分析に、イエイツのこの件りが通底すると指摘している。同書、五二、五三頁参照。
- (7) H. Bloom; *Yeats*, (London, O. U. P., 1978) p. 184.

- (8) M., p. 342.
- (9) W. B. Yeats; *A Vision*, (London, Macmillan, 1978) p. 82.
- (10) M., p. 337.
- (11) C. P., p. 347.
- (12) *ibid.*, p. 347.
- (13) *ibid.*, p. 367.
- (14) C. P., pp. 347-8.
- (15) See O. Bohlman; *Yeats and Nietzsche*, (London, Macmillan, 1982) p. 79——葉集だしの詩の第一連及び第二連と
 比較するための論点か' 第四連を引用して次のように知くする。"The marrow-bone wisdom of the Dionysian
 reveller is seen as far superior to the abstract wisdom of the Socratic philosopher".
- (16) W. B. Yeats; *Explorations*, (London, Macmillan, 1962) p. 305.
- (17) Allan Wade (ed.); *The Letters of W. B. Yeats*, (New York, Octagon Book, 1980) p. 922.